過去の災害

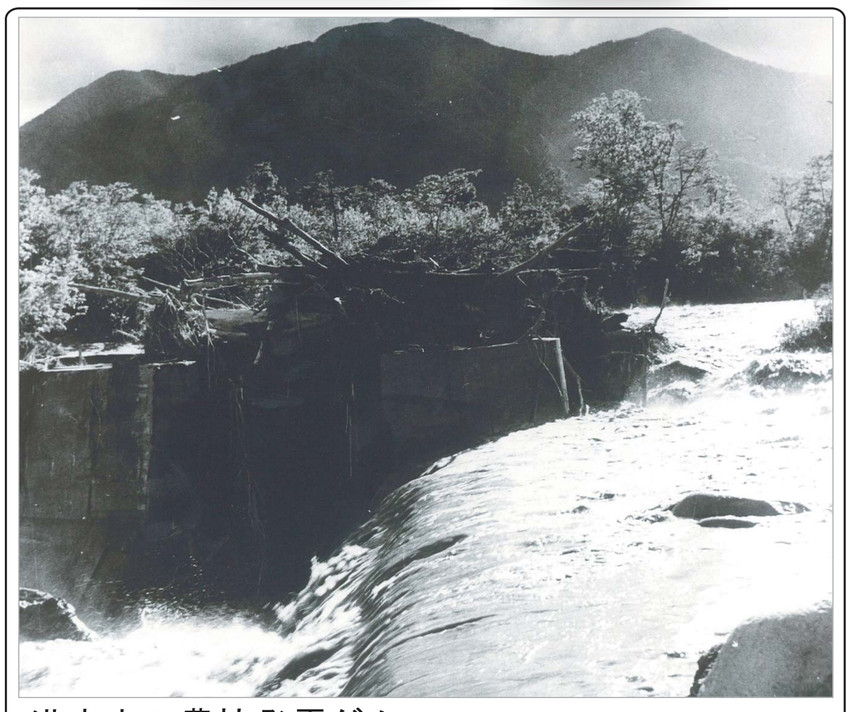
土砂により埋没した農協発電ダム
昭和30年7月　（現在のピョウタンの滝）

～一夜にして土石流に押し流された中札内農協ダム～

昭和26年４月、中札内農業協同組合は定期総会において、札内川上流において（現在のピョウタンの滝）自家用小水力発電所の建設を決議、この年の10月12日起工式を行った。この大事業は中札内村民と、隣接する大正、更別の村民合わせて680戸の、入植以来のランプ生活を解消し、電灯をともそうとするものであった。昭和29年１月25日、２年の歳月を要した工事も検定に合格し、いよいよ使用許可となったのである。この日の村民の歓喜の様子を「中札内村史」は次のように述べている。

『村内一面家庭の中は夜が明けたように点灯された。一球、一球の光は祭りのように賑わった。村民は多額の負担を忘れて、明るい一夜を明かした。送電された屋内の配線総戸数は750戸2990灯（馬屋も含む）であった。』

しかるに、昭和30年７月３日～４日、すさまじい集中豪雨が札内川上流地域を襲った。上札内の雨量６６㎜、札内川の流量1.550m^3/sを記録し札内川は大氾濫となった。前年の昭和29年９月の台風15号で倒された上流地域の風倒木は、多量の土石流と共に札内川にあふれ出し、発電所のダムはあっと言う間に土砂で埋没し、発電所の建設物も倒壊流失、せっかく灯された中札内村の文化の灯は一夜の嵐で濁流に消されてしまったのであった。



洪水中の農協発電ダム
昭和30年７月　（現在のピョウタンの滝）

～長崎の雨～

1982年の九州地方は、梅雨期の６月に降雨量が少なく、当初は渇水が心配されていたほどであった。しかし７月10日すぎてから長崎地方は断続的に雨が降り始め、市民の多くはそろそろ「雨はもういらない、早く梅雨が明けてくれればよいが」と言っていた。その矢先の７月23日、揚子江下流付近に発生した低気圧は発達しながら東へ進み、それにともなって梅雨前線が北上した。23日21時の天気図を見ると、梅雨前線がこの頃長崎県南部を横断しており、この前線に湿舌（多湿の気団の一形態）から湿った空気が流れ込み、記録的な豪雨が発生した。

この豪雨により、長崎県下では土石流が84ヵ所で発生した。うち74ヵ所は長崎市内に発生しており、その発生時刻は集中豪雨のあった19時から22時に集中している。

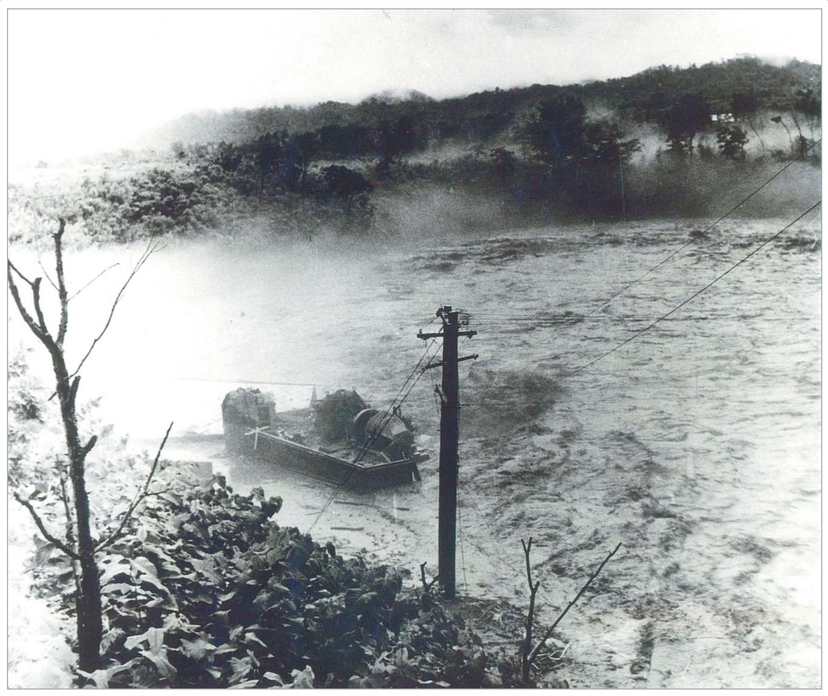
豪雨災害による死者・行方不明者299名のうち実に125名が土石流によるものだった。また全・半壊の家屋も316棟を数えるなどの被害が生じている。被害総額は約3153億円にもおよび、悲惨なものとなっている。

このほか、水道の断水は長崎市内だけでも10万1000戸を数え、浄水場の被害に加え道路の寸断により、８月に入っても東町を始め約2900世帯分の復旧のめどはたたない状態であり、停電とともに市民生活を麻痺状態に陥れた。土砂に埋まった家財道具さえも水で洗えず、病院では入院患者を他の病院に移す措置がとられた。

最も悲惨であったのは、一家の柱ともいうべき働き手を失った家族のうち、その後の生計の道をたたれ、家庭生活を元に戻せないまま親戚を頼って長年住み慣れた土地を離れなければならない家庭があったことであろう。土砂災害は家庭さえも情け容赦なく破壊してしまうのである。

池谷　浩（1999）『土石流災害』　岩波書店

右岸取付道路を洪水で洗い流された上札内橋



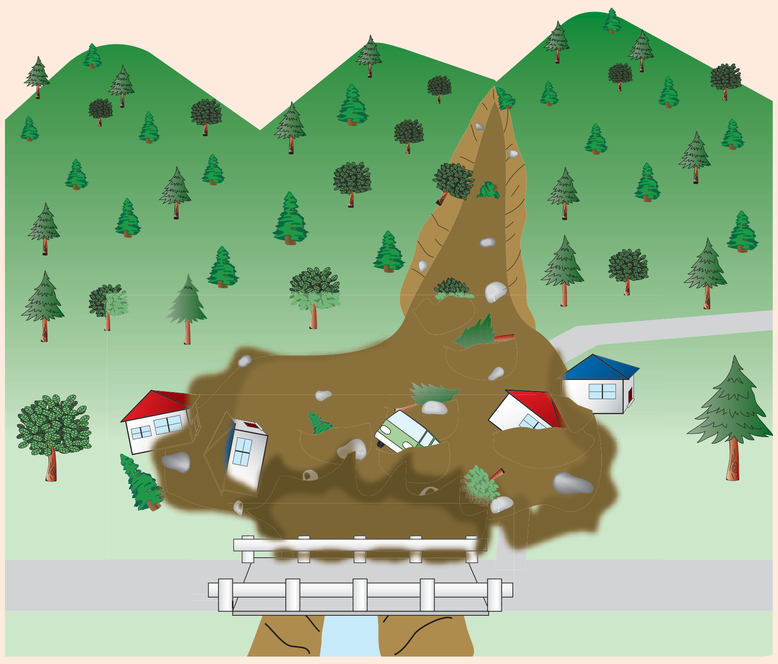
急激に増水した濁水は、一夜にして畑を川原に変えてしまう　（戸蔦別川）

川原と化した畑地帯
昭和30年７月　（上札内）

洪水に見舞われた上札内小学校

土石流とは・・・

山腹や川底の土砂が、長雨や集中豪雨などによって一気に下流へ押し流される現象を「土石流」といいます。その流れの速さは、時速20㎞～40㎞と自動車なみで、民家や田畑などを押し流してしまいます。土石流による災害は急な谷川や、谷の出口にある扇状地で比較的よく起こります。



土石流！

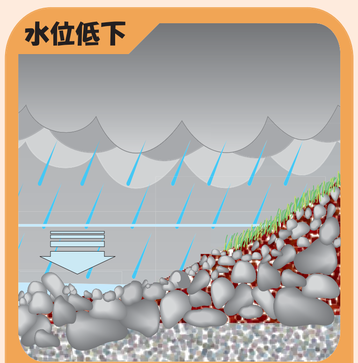
この兆候（ちょうこう）に注意しましょう!!

土石流を早めに察知することで、迅速（じんそく）に非難ができ、被害を軽減することができます。
次のような兆候には注意しましょう！

地鳴り

雷のような音が山から聞こえてくる

水位低下

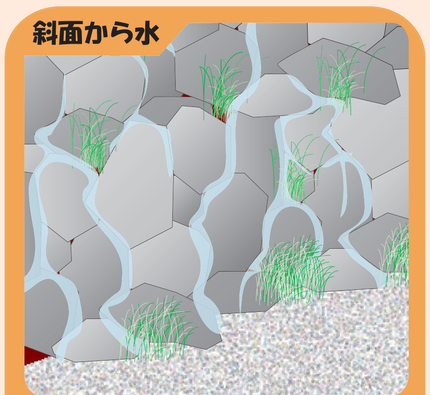


雨が降り続いているのに川の水かさが減る

濁水・流木

川の流れが急に濁ったり流木が混ざり始める

斜面から水



山の斜面から水が噴出す